

ลมจากกรุงเทพฯ

バンコクの風



JSPS
BANGKOK
NEWSLETTER
2016-17 Vol.2

Angkor Thom

アンコールトム (カンボジア)



JSPS BANGKOK

CONTENTS

JSPS 主催事業説明会の開催	01	センター活動記録	13
バンコク研究連絡センターの主催セミナー・	04	コラム	14
参加イベント		学術情報 (2016年7月-9月)	16
JSPS 同窓会情報	08		
特集「JASTIP:日ASEAN科学技術イノベーション			
共同研究拠点-持続可能開発研究の推進」			
JASTIPプロジェクトコーディネーター 高木 映	10		

センター長挨拶

10月13日にプミポン国王（ラマ9世）が崩御され、タイ政府は、公務員については1年間、国民については100日間喪に服すること、そして祝宴などの華美な行事は控えるようにとの告知を出しました。そのことを受け、当センターは、四半期ごとの活動報告書「バンコクの風」（2016年7－9月分）の発行を1か月遅らせることにし、本日発行致しました。ご理解を賜れば幸いです。

2017年は、日本とタイとの友好関係ができて130年目にあたります。それに向けての記念行事など、官民を挙げて準備を進めているところですが、今回の思いがけない状況の中で、華美にならず、でも両国の学術交流が進展できるように、JSPS バンコク研究連絡センターとしても細心の注意を払いながら、実施していきたいと思っております。皆様方のご支援、ご協力をこの場を借りてお願いする次第です。

2016年11月14日

JSPS バンコク研究連絡センター長

山下 邦明



JSPS 主催事業説明会の開催

バンコク研究連絡センターは、タイを中心に担当国の大学等高等教育や研究機関を訪問し、JSPS 事業説明会を行っています。当センターが訪れた機関の紹介と事業説明会の様子をお伝えします。

マヒドン大学パヤタイキャンパスで JSPS 事業説明会を開催（7 月 7 日）

マヒドン大学はタイでトップレベルの国立大学で、Times Higher Education による最新のアジア大学ランキングではタイ国内でトップ（Quacquarelli Symonds 社によるアジア大学ランキングでは国内で 2 番目）にランクされました。また、現在 JSPS の複数の国際事業に加わっており、日本との学術交流も積極的に推進されています。

説明会では、JSPS の二国間交流事業で日本の大学と共同研究をした経験をお持ちの理学部研究担当副部長 Tanakorn Osothchan 助教より開会の挨拶がありました。その後、フォトセッションを挟み、山下センター長が JSPS の概要を説明し、古屋副センター長と大田国際協力員が JSPS 国際事業の紹介を行いました。

また、JSPS タイ同窓会（JAAT）会員の Dr. Kittiphong Paiboonsukwong（写真）にもご講演いただきました。Dr. Kittiphong は、JSPS 外国人特別研究員として埼玉医科大学で研究された経験があり、日本での研究や生活の様子についてユーモアも交えながらお話いただきました。

説明会には 80 名を超える参加があり、若手研究者だけでなく中堅研究者の姿も多く見られました。Q&A セッションでは二国間交流事業や研究拠点形成事業についての質問も相次ぎ、説明会終了後も複数の参加者が個別に質問に来るなど、JSPS 国際事業への関心の高さが伺えました。



（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2016/07/07/4109/>）

キングモンクット工科大学トンブリ校（KMUTT）で JSPS 事業説明会を開催（7 月 25 日）

キングモンクット工科大学トンブリ（KMUTT）は、現在大学全体で外国人留学生や教員の受け入れを行うなど積極的に国際化を進めており、日本との学術交流にも積極的に取り組まれています。



説明会では、JSPS の招へい事業により日本での研究経験をお持ちの Vanida Bhavakul 学長顧問より開会の挨拶があった他、JSPS タイ同窓会（JAAT）会員であり、JSPS 外国人特別研究員として東京大学で研究された経験がある Dr. Pitch Sutteerawatthana に日本での研究経験についてご講演いただきました。

また、大阪大学をご退官後、KMUTT で国際交流顧問に就任されている関連治教授にもご講演頂き、研究計画や申請における研究内容のわかりやすさ等の重要性について、外国人研究者

を受け入れてきたこれまでのご経験を踏まえてお話し頂きました。

説明会には若手研究者から中堅研究者まで幅広い層の 80 名を超える参加があり、当センターからの回答の他、Dr. Pitch や関教授からも具体的なアドバイスを頂いたことで、参加した研究者と活発な意見交換を行うことが出来ました。また、Anak Khantachawana 学長補佐からは具体的に同大学での JSPS 国際事業の目標申請数を提示頂くなど、参加者に向けて JSPS 国際事業の積極的な活用を奨励頂きました。

また、今回のガイダンス終了後、Pornapit Darasawang 学長顧問（国際化担当）（右の写真前列中央）を表敬訪問しました。



（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2016/07/25/4151/>）

キングモンクット・ラートクラバン工科大学（KMITL）で JSPS 事業説明会を開催（7 月 26 日）

キングモンクット・ラートクラバン工科大学（KMITL）で、昨年に引き続き JSPS 事業説明会を実施しました。同大学は 1960 年にエンジニアや技術指導者を育成する目的で設立された理工系大学で、現在も優秀な理工系人材を数多く輩出しています。

説明会では、Pitac Thumwarin 副学長（評価システム・報酬担当）による開会の挨拶後、JSPS の概要及び国際事業について紹介を行いました。

また、JSPS タイ同窓会（JAAT）会員の Dr. Nathanon Phaiboonsilpa にもご講演いただきました。Dr. Nathanon は、JSPS 外国人特別研究員として京都大学で研究された経験があり、申請時の手順や立命館山



高校でのサイエンスダイアログの様子等についてお話しされました。

引き続き、同大学内にオフィスを構える東海大学及び福岡工業大学の紹介も行われました。

Q&A セッションでは JSPS 外国人特別研究員事業に関する質問の他、東海大学や福岡工業大学に対する質問もありました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2016/07/26/4165/>）

デラサール大学（フィリピン）を表敬訪問及び JSPS 事業説明会を開催（7 月 30 日）

デラサール大学はフィリピン・マニラにある私立大学で、1911 年にフィリピン初のカトリック系学校として創設されました。

事業説明会に先立ち、Raymond Girard Tan 副学長（研究・イノベーション担当）（写真左）を表敬訪問した他、学内研究施設を見学しました。

事業説明会には約 40 名が参加し、Jhonathan Dungca 工学部長の開会の挨拶に続いて、山下センター長と古屋副センター長が JSPS の概要と国際事業について紹介を行いました。

引き続き、JSPS 事業経験者である Prof. Iris Ann Martines と Prof. Michael Anglo B. Promentilla 両氏にご講演いただきました。Prof. Martines は、現在フィリピン大学ディリマン校工学部で活動されており、RONPAKU 事業により 2010 年に東京工業大学で PhD を取得されました。講演では日本で研究を希望された経緯や論文作成時の苦労、そしてフィリピンで研究を続けながら PhD を取得することができ、RONPAKU 事業の制度が自分には適していたことなどをお話いただきました。



一方、Prof. Promentilla はデラサール大学 廃棄物・化学物質マネジメントユニット長で、JSPS 外国人特別研究員として北海道大学で研究をされた経験があります。講演では、日本での経験だけでなく、研究者として重要なポイント等についてもお話いただき、ご自身の経験をもとに参加者にワールドワイドな研究者になって欲しいという非常に熱意あるメッセージを送られました。



（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2016/07/30/4184/>）

JSPS 主催事業説明会の開催

マレーシア科学大学（USM）にて JSPS 事業説明会を実施（9 月 7 日）

2016 年 9 月 7 日、マレーシア科学大学（USM）にて初めて JSPS 事業説明会を実施しました。USM はマレーシア・ペナンにあるマレーシアのリーディング大学で、当センターとしてもマレーシアの大学で事業説明会を行うのは今回が初めてでした。



今回の事業説明会は、USM の日本文化センター（JCC）副田雅紀センター長（写真左）にご支援、ご協力いただき、事業説明会前には JCC のオフィスを訪問しました。JCC は、昨年 12 月に東レ（株）の寄贈により設立された「東レ-USM ナレッジトランスファーセンター」内にオフィスを構えており、オフィス内には日本語や日本文化に関する書籍が多数設置されています。日本から多くの学生が短期留学・研修等で訪れるほか、USM の学生もオフィスを訪れ、日本とマレーシアの交流の場にもなっています。

説明会では、JSPS 事業経験者である Abdul Rahman 副学長（Deputy Vice Chancellor）（左下写真）から開会の挨拶をいただきました。

参加者の JSPS 国際事業に対する関心は非常に高く、各事業に対し多くの質問が寄せられました。これらの質問に対し丁寧に回答すると共に、山下センター長から申請前に日本の研究者としっかりコミュニケーションを図ることが重要であるとのアドバイスが送られました。



また、会場には JSPS 事業経験のある研究者も複数おり、自身の経験についても積極的に語っていただきました。

今回のセミナーでは TV 会議システムを利用し、説明会の様子が別のキャンパスにも中継されるなど、50 名以上の参加者に JSPS の事業を知っていただく良い機会となりました。当センターも USM の研究者らと交流を深めることができ、双方にとって実り多き説明会となりました。



（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2016/09/07/4369/>）

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

バンコク研究連絡センターでは、対応機関であるタイ学術会議（NRCT）と学術セミナーを共催しているほか、バンコクで実施される国際的な学術シンポジウムやイベントに積極的に参加し、ASEAN地域の最先端の学術情報の収集に努めています。

Thailand Research Expo 2016 にて JSPS-NRCT セミナーを主催（8 月 19 日）

タイ学術会議（NRCT）が主催する Thailand Research Expo 2016 会場にて JSPS-NRCT セミナーを実施しました。今年は、2015 年にニューヨークで開催された「国連持続可能な開発サミット」で採択された成果文書「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」を基に、「The Mission of Education and Research for Sustainable Society」をテーマとして日本より東京理科大学・黒田玲子教授、福岡女子大学・和栗百恵准教授、大阪大学・淵上ゆかり特任助教を招きセミナーを実施しました。また、今回はカセサート大学の Prompilai Buasuwan 准教授がモデレータを務め、講師及びモデレータ全員女性での開催となりました。



最初の講演は、今回のセミナーのテーマでもある「Mission of Education and Research for Sustainable Society」と題し、黒田教授（左写真）にご講演頂きました。黒田先生は 2013 年にロレアル・ユネスコ国際女性科学者賞を受賞されるなど科学者としてもご活躍されている一方で国連事務総長科学諮問委員会委員も務められており、今回はご自身の研究テーマである「キラリティ（左右非対称性）」から、「科学」と「社会」を繋ぐために日々精力的に活動されている取り組みについて講演いただきました。

続いて、和栗准教授により「Experiential Learning and Japanese Higher Education: Nurturing Reflectivity, Nurturing Global Citizens」と題し、日本の高等教育の在り方やアカデミアの役割等についてご講演いただきました。講演の中で福岡女子大学の学生がスリランカで「開発」をテーマに行ったフィールドスタディの紹介があり、それに参加した学生らは、言語や文化等による様々な苦勞を乗り越えながら、プログラム後に彼らの考え方や関心にも前向きな変化が見られたそうです。これらの事例から学生の「reflectivity（顧みて熟考し、次の行動に生かすこと）」を育むことができるよう大学が組織的に取り組むことが重要であるとの説明がありました。

引き続き、「Sustainable Management of Natural Resource Use: The Coexistence of Conservation, Economic Activity and Regionality」と題し、淵上特任助教がご自身の研究である「日本の山林管理問題・バイオコックスの分析・伝統的な天然資源の活用」を基に、持続可能な天然資源の活用の難しさについてご講演頂きました。今回の講演のキーワードとなる「sustainable society」について、最後に正解はないが最良の解を見つけるためにも様々な観点から研究者が連携を行う必要があるとの説明がありました。

最後に、山下センター長より、3 名の女性研究者とモデレータに感謝の言葉が述べられると共に、来年の日タイ修好 130 周年という節目に合わせ今後一層日本とタイの連携を強化し、JSPS 及び NRCT もイベントを盛り上げていきたい、というコメントで会を締めくくりました。



（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2016/08/19/4231/>）

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

タイ科学技術展への出展及び視察（8月22日）

2016年8月22日、同18日から開催されていたタイ科学技術展（NATIONAL SCIENCE AND TECHNOLOGY FAIR 2016）を視察しました。タイ科学技術展は、国民の科学技術への関心を高めるためにタイ科学技術省（MOST）及びタイ国立博物館が毎年主催しており、例年100万人以上が来場する科学技術に関するタイ最大のイベントです。今年は同28日までの11日間にわたり開催され、タイ国内の教育研究機関や企業のほか、国際パビリオンでは日本、イギリス、アメリカ、ドイツが出展し、科学技術開発の成果を展示しました。当センターもブースを出展し、JSPS国際交流事業の紹介とともに、タイにオフィスを設置する日本の大学等教育関係機関の紹介ポスターを展示しました。



19日のオープニングセレモニーでは、MOSTのピチュート大臣及び在タイ日本国大使館の佐渡島大使が日本のブースを視察されました。

また、フェア最終日には、参加機関に対する感謝トロフィーの授与式が行われ、当センターも出席しました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：
<http://jsps-th.org/2016/08/22/4225/>）

東北大学タイ代表事務所開所式に出席（8月29日）

2016年8月29日、東北大学のタイ拠点事務所となる「東北大学タイ代表事務所」がチュラロンコン大学内に開設され、それを記念して開所式が執り行われました。

開所式には両大学の学長、関係者の他、在タイ日本国大使館の寺島一等書記官らが出席し、当センターからも古屋副センター長、大田国際協力員が出席しました。

オープニングセレモニー後は、MoUの署名式、テープカットに続き、新事務所の施設案内も行われました。

新事務所はその他の協定校も共同で利用するオフィスとなっており、オフィスの隣には留学等の相談窓口となるワンストップサービスセンターも開設されており、今後のスムーズな手続きが期待されます。

なお、東北大学の植木俊哉理事（総務、国際展開、事務統括担当）及び宮元博央国際交流課連携推進係長は同日開催された在タイ大学連絡会（JUNThai）（6頁参照）にも参加され、植木理事より新事務所開設の報告がありました。



（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2016/08/29/4287/>）

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

第8回在タイ大学連絡会（JUNThai）開催（8月29日）

2016年8月29日、在タイ日本国大使館で第8回在タイ大学連絡会（JUNThai）が開催され、今回は前日開催されていた日本留学フェアに合わせて開催されたこともあり、40機関（オブザーバー18機関含む）79名の参加がありました。

第1部では、以下3名による講演が行われました。

まず、在タイ日本国大使館の佐渡島志郎特命全権大使が、「産業人材育成イニシアティブと大学への期待」と題し、タイの産業人材育成の現状と今後の取組等について他国との比較をしながらご講演されました。

産業が集積しているタイでは人材が労働市場に十分供給されておらず、また給与やキャリアパスにも魅力が足りないのが現状です。今後3年間で4万人の人材育成・輩出を目指すことや、PhDを所有する研究者を1万2千人に輩出しようとしているタイ政府の計画や、新規事業を募集し日本の大手企業と連携する計画等について紹介がありました。また、輩出した人材はタイだけでなくASEANでも活躍できるように受入先をつくることも重要であると述べられていました。そして、これらの事業を推進するためには、タイの省庁や大学が各機関と連携していくことが必要で、この橋渡しを日本の大学に是非行ってほしいと強調されておられました。

質疑応答では、「日本の産業はトップ研究者だけではなく、中小企業のエンジニアの技術力に支えられており、タイでもその層のキャリアパスも考える必要があるのではないか」との質問に対し、佐渡島大使より「その点はタイ政府も意識しており、タイ政府ができないことを日本が支援することが重要である」との回答がありました。

続いて、タイ学術会議（NRCT）の Panee Panyawattanaporn 国際事業部長が「Introduction of NRCT and academic collaboration between Japan and Thailand」と題し、NRCTの概要等を紹介されました。

講演では、首相が議長を務めるNRCTの運営体制やビジョン、資金提供実績の他、タイのその他6つの研究助成機関から構成されるタイ研究助成機関ネットワーク（TRON）ならびにそれぞれの機能の違いについての説明もありました。



最後に、(独)国際交流基金（JF）バンコク日本文化センターの玄田悠大日本語部長は、タイでの日本語教育に係る取り組み等についてご講演されました。海外の日本語学習者の約30%は東南アジアの学習者で、近年日本語学習者が増える一方で、教師数・教育機関数が増加に追いついていないのが現状とのことでした。そのためJFでは日本国内の大学等で日本語教育を専攻する学生をタイの日本語教育機関に派遣し研修を行うプログラムを提供しており、同プログラムのタイの受入大学等について紹介がありました。

第2部では、(独)日本学生支援機構（JASSO）米川英樹理事より、2016年8月26日、28日にそれぞれチェンマイ、バンコクで開催された日本留学フェアについて報告がありました。来場者数は一昨年と比較すると約2割増加しており、また昨年開催のフェアに対するアンケート結果では日本に留学した場合、希望授業言語として日本語を希望する学生は約40%いるなど、日本留学に対する関心の高さが伺える結果になったとのことでした。

また、JUNThaiへの新規加盟校として東亜大学の紹介があった他、現在幹事校を務めている名古屋大学と福井工業大学の任期満了に伴い、2016年9月からは青山学院大学と東京農工大学が次期幹事校になる旨の報告があり、承認されました。

そして、最後に当センターの山下センター長よりタイ科学技術展（5◇参照）への協力の御礼と来年以降の協力依頼がありました。また、大学の学生や職員がタイで研修を行う際は、当センターとしてはJSPS事業説明会を開催するなど今後も協力連携していく旨を述べられました。



（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2016/08/29/4291/>）

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

Kyoto-ASEAN Forum 2016に参加（9月8,9日）

2016年9月8、9日、マレーシア・クアラルンプールで開催された Kyoto-ASEAN Forumに参加しました。

同フォーラムは京都大学が主催したもので、同大学の「WINDOW 構想」をコンセプトに、日本と ASEAN 各国が、日-ASEAN の学術的交流・発展、また将来のビジョンについて話し合う機会を提供する事を目的として開催され、ASEAN7 ヶ国の関係機関や大学等の関係者、学生 250 名以上の参加がありました。

初日は、マレーシア青少年・スポーツ省大臣らによる開会挨拶に始まり、山極寿一京都大学総長、日立（株）武田晴夫研究開発本部技術戦略室長の基調講演が行われたほか、「Promising Researchers Reflect on their Research」「Research and Social Innovation」「Study with Kyoto University」をテーマに日本・マレーシア・インドネシア・タイの若手からベテランまで、バラエティに富んだ講演が行われました。

2 日目は 2 つの会場を使って各テーマを設け、パネリスト及び参加者が課題解決に向けて議論する課題解決セッションが行われました。初日の華々しいセレモニーとはまた違った和やかな雰囲気の中、第 1 部として「International Cooperation in Research and its Sustainability Part1」「Mutual Students Mobility between Japan and ASEAN」をテーマにセッションが並行して行われ、山下センター長と古屋副センター長がそれぞれパネリストとして JSPS の事業紹介等を行いました。



その後、第 2 部では「International Cooperation in Research and its Sustainability Part2」「Mutual Young Researchers Mobility between Japan and ASEAN」というテーマのもとセッションが並行して行われました。当センターは後者のセッションに出席し、山下センター長が引き続きパネリストとしてプレゼンを行いました。質疑応答では、JSPS の国際事業への申請資格等に関する具体的な質問もあがる等、多くの関心を得られました、また、全体としてもセッションの中では自由に意見が述べられ、各国の交流が積極的に図られる良い機会となりました。

(JSPS Bangkok Office ホームページ: <http://jsps-th.org/2016/09/09/4378/>)

山口大学・カセサート大学共催セミナーに出席（9月20日）

2016 年 9 月 20 日、バンコク日本大使館ホールで、山口大学・カセサート大学共催のセミナー「発酵製品を製造する新しい技術」が開催され、山下センター長が出席しました。このセミナーは、山口大学が日本側の拠点となって 2014 年度に採択された JSPS の先端拠点形成事業（A タイプ）「バイオ新領域を拓く熱帯性環境微生物の国際研究拠点形成」の一環として実施されたもので、開会式では、佐渡島志郎在タイ日本国大使による歓迎の挨拶の後、カセサート大学の Lily Kaveeta 副学長（学術研究担当）、山口大学の堀憲次副学長がそれぞれ主催者挨拶を行いました。その後、タイ国農業研究開発機構（ARDA）の Panpimon Chunyanuwat 理事長、タイ学術会議（NRCT）の Yassawadee Ungvichian 上級顧問と山下センター長がそれぞれ祝辞を述べました。

引き続き行われた研究発表では、両大学のほかチュラロンコン大学、チェンマイ大学、コンケン大学、シーナカリンウィロート大学、プリンスオブソンクラ大学などタイの主要な研究大学の先生方が「発酵」に関連する新技術開発についての成果を披露しました。

なお両大学は、同 11 月 14 日カセサート大学バンケンセンキャンパスで、一昨年のチェンマイに続いて第二回目の拠点形成事業の成果発表セミナーを開催する予定です。



(JSPS Bangkok Office ホームページ: <http://jsps-th.org/2016/09/20/4405/>)

バンコク研究連絡センターは、日本学術振興会の国際交流事業で訪日経験のある研究者の組織である「JSPS 同窓会」の支援も積極的に行っており、現在管轄地域内に同窓会が組織されているタイ・バングラデシュ・フィリピン・ネパール JSPS 同窓会の活動支援、また、ベトナム、インドネシアでの新規同窓会設立に向けても支援を行っています。

2016 年度第 2 回 JSPS タイ同窓会（JAAT）理事会の開催（7 月 13 日）

今年度第 2 回目の JSPS タイ同窓会（JAAT）理事会をタイ学術会議（NRCT）で開催しました。



今回の理事会では、JSPS フィリピン同窓会（JAAP）主催のシンポジウム（9 頁参照）への出席や JAAT の 2016 年次計画について協議しました。

また、山下センター長より 8 月 19 日に NRCT と JSPS による共催セミナーについて、テーマや講演者及びモデレータについて説明がありました。

なお、今回よりシンガポールでの研究のため JAAT 理事を一時的に離任していた Dr. Porphant Ouyyanont（写真後列右から 5 番目）が理事に復帰されました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2016/07/13/4124/>）

2016 年度第 3 回 JSPS タイ同窓会（JAAT）理事会の開催（9 月 14 日）

今年度第 3 回目の JSPS タイ同窓会（JAAT）理事会をタイ学術会議（NRCT）で開催しました。

今回の理事会では、JAAT の 2016 年及び 2017 年次計画について説明があり、2017 年 2 月には例年同様国際学術セミナーを開催し、同 7 月には JAAT 会員名簿の更新・作成を行う旨の報告がありました。また、JAAT 主催の地方大学（コンケン及びプリンスオブソンクラーク大学）でのワークショップ開催について、トピック及び開催時期について検討がなされました。また、上記国際学術セミナーについては、JAAT 側より日本から医学、自然科学、社会科学の各分野から 1 名ずつ計 3 名の研究者を講師として招へいしたい旨の要望がありました。

また、7 月 29 日に開催された JSPS フィリピン同窓会（JAAP）主催のシンポジウム（9 頁参照）に JAAT より Dr. Danai が出席し、その様子等についても報告がありました。

そして、山下センター長からは 8 月 19 日に開催された JSPS-NRCT セミナー（4 頁参照）について、セミナーへの支援や出席に対する御礼と共に、活気のあるセミナーとなり成功裡に終了した旨の報告がありました。また、来年は日タイ修好 130 周年にあたる年であり、同セミナーも記念イベントになるよう検討したいと述べ、これに対し NRCT の Pannee 国際事業部長より協力、支援したい旨の発言がありました。



（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2016/09/14/4396/>）

第4回 JSPS フィリピン同窓会（JAAP）シンポジウム及び同窓会総会の開催（7月29日）

2016年7月29日、フィリピン・パサイで第4回 JSPS フィリピン同窓会（JAAP）シンポジウム「Sustainable Food System Innovation in the Changing Global Environment」を開催しました。

シンポジウムでは、JAAPのJaime C. Montoya 会長が、持続可能な農業を推進することを掲げた国連の「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に触れながら開会の挨拶をされた他、在フィリピン日本大使館 北川達生参事官、当センターの山下センター長からの祝辞、フィリピン科技省（Department of Science and Technology: DOST）のFortunato T. de la Peña 大臣からの基調メッセージが述べられました。

基調講演では、東京農業大学副学長の夏秋啓子教授（右写真）に「Tomorrow's Lunchbox by Safe Food Production」と題し、ご講演いただきました。今回の講演では、「お弁当」という日本人にとってはとても身近なテーマを取り上げ、その魅力やメリットを紹介するとともに「食料自給率」、「害虫防除」、「食育」、「農産物の流通管理」、「食の安全」などについて幅広い内容でお話しいただきました。



続いて、フィリピン大学農学部 Dr. Susan May F. Calumpang から「Farmer Innovations Alternative Pest Management Strategies」というテーマで、害虫駆除剤を使用しない害虫制御システムについてご講演いただきました。

また、午後の部では北海道大学大学院獣医学研究科の片桐成仁教授に「Livestock Breeding Innovations Toward Food Sufficiency - A Research on Uterine Receptivity as a Missing Piece of MOET Technology」というテーマでご講演いただきました。片桐教授は、家畜の胚移植や人工授精に関する研究をされており、今回は「過剰排卵 - 胚移植（MOET）技術」をキーワードのひとつとして紹介されました。この技術を使用することで、通常の繁殖よりも良質な家畜を多く安定的に供給することができ、食料自給率の改善に寄与することもできるとのことでした。

最終セッションでは、山下センター長による JSPS 概要や国際事業について紹介があり、また、JSPS タイ同窓会（JAAT）のDanai Tiwawech 事務局長が挨拶を述べるとともに JAAT の活動の紹介を行いました。

さらに、JSPS 国際事業経験者の Dr. Michael Angelo B. Promentilla、Dr. Shelah Mae B. Ursua、Ms. Sheryll Santander-Avanceña 及び Dr. Orlex B. Yilano の4名が、それぞれ外国人研究員招へい事業、論文博士号取得希望者に対する支援事業（RONPAKU）、HOPE ミーティング、外国人研究者再招へい事業での経験等について講演を行い、講演終了後には Dr. Shelah に RONPAKU のメダルが授与されました。



最後は JAAP の Susan M. Gallardo 副会長による閉会の挨拶によりシンポジウムが締めくくられました。

今回は JAAP メンバーをはじめ約50名の参加があり、終始活気のあるシンポジウムとなりました。

なお、同日に同窓会総会も開催され、2年に1度の理事会改選が行われました。投票の結果、新しく現副会長の Dr. Susan が会長となり、総会では理事会新メンバーによる宣誓式も行われました。



（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2016/07/29/4173/>）

今回の特集では、JASTIP (Japan-ASEAN Science, Technology and Innovation Platform) プロジェクトコーディネーターを務められている高木映氏に、JASTIP の取組みについてご寄稿いただきました。高木氏は、同事業内で幅広い業務に従事されており、9 月に開催された Kyoto-ASEAN Forum 2016 (7 頁参照) においても JASTIP として中心的な役割を担われました。

JASTIP は国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) の国際科学技術共同研究推進事業によるプロジェクトですが、その研究活動には JSPS の科学研究費も寄与しており、タイ国立科学技術開発庁 (NSTDA) にて上記 3 機関による合同説明会も実施しております (この様子については次号で紹介予定)。

※寄稿の記事・論文、図表、写真等の著作権は執筆者に帰属しています。無断複製又は無断転載はおやめください。

JASTIP : 日 ASEAN 科学技術イノベーション共同研究拠点—持続可能 開発研究の推進

JASTIP プロジェクトコーディネーター

たか ぎ あきら
高 木 映

はじめに

JASTIP (ジャスティップ) という聞きなれない名前の科学技術に関する研究の日本の新たな拠点が 2016 年にバンコクに設立され、2016 年 2 月 26 日にバンコクの日本大使公邸において開催された



【JASTIP 開所式】

「日 ASEAN 科学技術イノベーション共同研究拠点 (JASTIP)」の開所式を起点に活動を本格化させました。JASTIP は、日 ASEAN が直面する地球規模課題である環境・エネルギー、生物資源・生物多様性、防災の 3 分野に焦点をあてた持続可能開発研究を日 ASEAN 研究者のイニシアティブで推進し、持続可能社会への転換を先導するソーシャル・イノベーションを加速化するとともに、それらの活動をより日本の「顔がみえる」、「顔をみてもらえる」ものとするために、日 ASEAN の科学技術協力に関するプラットフォームとなることを目的として JST の支援の下 5 年間のプログラムとしてスタートしました。

改めてこの場で言うまでもなく、これまで日本と ASEAN 諸国との間では数多くの科学的な共同研究が実施されてきております。その規模は、政府間での取り決めによる大規模な ODA に関連する案件から、大学間での研究協定、一研究者による現地調査まで大小さまざまです。

JASTIP ではこれまでの多種多様な共同研究により育まれてきた日本と ASEAN の「人と人のつながり」の蓄積こそが日 ASEAN の持続的な関係構築に大きく寄与し、今後さらに重要度が増してくると思っています。

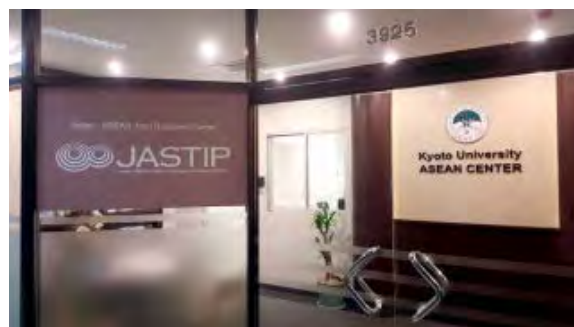
「人と人のつながり」やその波及成果は、研究組織や世代を超えて継続的に蓄積されるわが国の貴重な財産であり、研究者個人や個々の研究組織の範疇で留めておくべきものではありません。そのため、個々の科学技術研究協力事業を超えて、より長期的な視点から科学技術協力を持続的、組織的に推進する取り組みが求められています。

拠点の設置

JASTIP では、日本と ASEAN 諸国の科学協力とイノベーションの促進に向けて、バンコクの中心部アソークに中核拠点を設置しています。中核拠点では、10 人程度でのミーティングが開催できる会議スペースのほか、テレビ会議システムや wi-fi を完備すると共に、タイ人スタッフが常駐しており、日 ASEAN の科学技術に関わる研究者や企業の方など多くの方にご利用いただけます。

jastip-contact@kura.kyoto-u.ac.jp

オフィスアワー：10 時-17 時(タイ時間)



【中核拠点】

また、中核拠点のほかに、科学技術を推進する拠点として、タイ国立科学技術開発庁（NSTDA）に環境・エネルギー研究拠点を、インドネシア科学院（LIPI）に生物資源・生物多様性研究の拠点、そして、マレーシア日本国工科院（MJIIT）に防災研究拠点を設置し、オールジャパンの研究者の共同研究の一つの拠点として日 ASEAN における最先端の持続可能開発研究と次世代研究者育成に関わる科学技術協力に関する活動を推進しています。



【タイ国立科学技術開発庁（NSTDA）；環境・エネルギー研究拠点】

具体的には、バイオマス廃棄物のエネルギー化、有用熱帯植物の高度有効利用、大規模自然災害の早期警戒システムといった、各分野での先端的な技術開発や実用化促進のための研究に取り組んでいます。特に社会実装に関しては、大学や研究機関のみならず、民間企業や NGO/NPO と連携による実効性の向上に努めています。



【インドネシア科学院（LIPI）；生物資源・生物多様性研究拠点】



【マレーシア日本国工科院（MJIIT）；防災研究拠点】

JASTIP-Net

JASTIP では、持続可能開発に関心を持つ日 ASEAN の研究者や多様な関係者とのオールジャパン、オール ASEAN でのネットワークのさらなる強化に向け、JASTIP の研究活動に参加する新たなメンバー募集“JASTIP-Net”を行っています。JASTIP-Net では、JASTIP が設定する課題に関する共同研究を実施するパートナーを日 ASEAN の研究機関・大学、民間企業等から広く募集しています。2016 年度の募集はすでに終了していますが、研究テーマとしては、ASEAN 地域における「産学官の連携強化」、「再生可能エネルギー普及促進」、「生物資源の持続的な利活用法」、「国境を超える災害への対応」など持続可能な社会に向けた広範囲なテーマを設定しました。2017 年度も引き続き、募集を予定しています。

最後に

JASTIP 拠点の開設に際しての、JASTIP 研究代表者の河野泰之教授のコメントを記させていただきます。わが国と ASEAN 諸国の共同研究はすでに長い蓄積があり、それらは、科学技術に関する輝かしい実績を生んできました。また、これらの共同研究は、指導的立場にある研究者を輩出するとともに、次のリーダーとなる研究者を育ててきました。本事業は、このような社会に誇るべき実績をより広く日 ASEAN 社会に理解していただくとともに、共通の目標である持続可能開発の駆動力となる研究推進を、わが国と ASEAN 諸国とのより緊密な連携体制のもとで加速することを目的としています。そのような研究推進のためには、研究者がそれぞれの専門分野に閉じこもるのではなく、研究分野や国を超えて連携し、また持続可能開発に関わるさまざまなステークホルダーと協働して、研究や人材育成を展開していく必要があると考えています。関係者のみなさまには、なにとぞご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。



【タイ科学技術フェア 2016 に JASTIP として出展】
（左から Thaweesak 前タイ国立科学技術開発庁長官、佐渡島駐タイ日本国大使、Pichet 大臣、柴山 JASTIP 中核拠点リーダー、筆者）



JASTIP Headquarters

No. 3925, 9F, BB Building, 54 Sukhumvit, 21 (Asoke),
Klongtoey Nua, Watthana, Bangkok 10110, Thailand

Tel: +66-(0)2-664-0060 Fax: +66-(0)2-664-0960

Mail: jastip-contact@kura.kyoto-u.ac.jp

Web: <http://jastip.org/>

センター活動記録

バンコク研究連絡センターの2016年7月から9月期のその他活動は以下のとおりです。センターにはタイ及びASEAN諸国との学術の国際交流を目的とし、日本やタイの研究者や高等教育関係者が訪れます。当センターは訪問者への現地での便宜供与や学術情報の交換・助言を行っています。詳しい活動記録は当センターウェブサイト (<http://jsps-th.org/>) に掲載しておりますのでご参照ください。

7月

- 11日 九州大学 相澤伸広准教授 及び 京都大学 中西嘉宏准教授の来訪
- 13日 電気通信大学 ASEAN 教育研究支援センター (UARC) 技術相談室 高橋隆司客員教授の来訪
- 14日 東亜大学 櫛田宏治学長、平松隆円准教授 及び 福井大学 竹本拓治准教授の来訪

8月

- 2日 京都大学 ASEAN 拠点 柴山守所長 及び 園部太郎 URA の来訪
- 5日 明治大学 小林正美副学長 及び 田中友章専任教授の来訪
- 15日 北陸 ESD 推進コンソーシアム タイスタディーツアーグループの来訪
- 22日 ASEAN University Network (AUN) ・岡山大学・千葉大学スタディーツアー「"AUN - SUN/SixERS Study and Visit Programme: Discovery, Diversity, Dynamics (3Ds)"」の来訪
- 23日 明治大学 政治経済学部 加藤久和教授の来訪
- 29日 日本学生支援機構 (JASSO) 米川英樹理事ならびに同職員の来訪
- 30日 福井工業大学職員の来訪
東亜大学 平松隆円准教授の来訪
九州大学 大学院工学研究院 河野正道准教授 及び 横山美貴職員の来訪
沖縄科学技術大学院大学 (OIST) 浅井孝司理事長補佐の来訪
- 31日 大阪大学学生の来訪
明治大学 大六野耕作副学長 及び 直塚太郎職員の来訪

9月

- 1日 岡山大学 鄭幸子准教授の来訪
宮城教育大学 見上一幸学長の来訪
- 6日 法政大学 大学院政策創造研究科 増淵敏之教授の来訪
東京国際大学 小林健男 Eトラック企画部統括部長の来訪
- 12日 北海道情報大学 穴田有一教授の来訪
- 16日 チュラロンコン大学 中須正講師の来訪
- 28日 千葉大学 小田雄一教授の来訪

大田国際協力員の思いっきりタイ験記

今号ではタイの人気スポーツであるバドミントンについて取り上げます。タイでは近年サッカー、バレーボールなどもメジャースポーツとなっており、一方でセパタクローやムエタイなども伝統的なスポーツとして人気があります。私自身も休日には市内のバドミントンクラブに参加している他、様々なスポーツイベントを観戦しました。以下ではバンコクで開催されたバドミントンの国際大会の様子を紹介します。

まずは7月に開催された「バドミントンアジアジュニア選手権 2016」。この大会は名前の通り、アジア地域の19歳未満のジュニア選手による大会で、国別団体戦と個人戦5種目（男女各シングルス・ダブルス、混合ダブルス）があります。この大会で上位の成績を収めた選手は、その後のオリンピックや世界戦選手権でもトップクラスの成績を残すことも多く、将来一流選手になるための登竜門とも言える大会です。

私が観戦したのは団体戦でしたが、会場ではジュニアらしい非常に熱い戦いが繰り広げられていました。シニアの大会と比較するとプレーに粗さはあるものの、個人的にはジュニアの大会は大好きです。懸命にシャトルを追いかける姿、またそれを応援するチームの仲間達を見てみると「ああ青春だなあ」なんて胸が熱くなり、本当に素晴らしいものを見せてもらいました！（ちなみに今大会タイと日本は3位でした。）



男子ダブルス タイ（手前）×インド
ジュニアといえどもスピードや迫力は圧巻

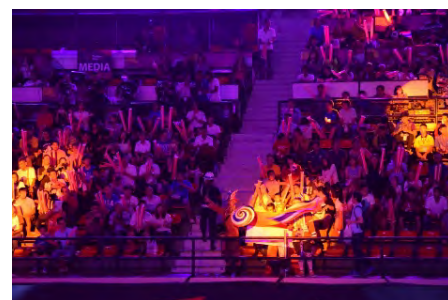


こちらは女子シングルス
右側は Pornpawee 選手 タイのホープだ

続いて10月に開催された「SCG タイランドオープン 2016」（※バドミントンの国際大会は、ランキングポイントに応じてグレード分けされており、同大会は中グレードに位置する）。さすが賞金のかかった国際大会だけあり、観客も多く、演出もしっかりしているうえ、当然試合の質やレベルも一段と上がります。

大会最終日の決勝戦を観戦しましたが、タイ人選手は5種目中3種目で決勝に進出していました。ちなみに日本人選手も3種目で決勝に進出しており、女子シングルスと女子ダブルスはタイと日本による決勝戦となりました。

タイ×日本戦はどちらにも勝って欲しいという複雑な気持ちで見守っていましたが、見応えのある試合ばかりで、思わず「おお！」と声の出してしまうようなナイスプレーに何度も見とれてしまいました！また、今回の観戦で特に印象に残ったのは、試合後勝敗に関係なく、審判、観客に対してワイ（※合掌してお辞儀をするタイの伝統的な仕草）をするタイ人選手の姿でした。彼らは子供の頃から当たり前のようにやってくるので習慣化しているのでしょうか、ワイをしている姿は本当に美しい光景で、素晴らしい文化だなと改めて実感しました。



会場の様子 日本人の観客も多かった



女子ダブルス決勝戦 日本（オレンジ）×タイ（黒）
この試合はタイ側に軍配が上がった



試合終了後、観客に対してワイ
をするタイの Busanan 選手



男子ダブルス 日本の井上選手・金子選手
結果は惜しくも2位だった

この頁では、10月13日に御崩御されたプミポン国王に関する記事を取り上げます。実は国王とタイのバドミントンには深い関係があり、それに関する記事がタイの地元紙 BANGKOK POST (10月16日付)に掲載されていたので、一部要約する形で紹介させていただきます。

『タイバドミントン界の成功は国王の恩恵によるータイの偉大な元バドミントン選手 Charoen 氏が国王のバドミントンへの寛大な貢献を明かすー』

バドミントンは国王の好きなスポーツの1つで、国王のバドミントンへの貢献は、タイ国史上最高かつ偉大なバドミントン選手の一人である Charoen Wattanasin 氏の著書「至高の追求」の中で大いに称賛されており、同氏はその中で以下のように語っている。

「国王は 60 年以上にわたって継続的な支援をされ、この支援がなければ、タイのバドミントンは今日のような成功を収めていなかっただろう。」

タイバドミントン協会前会長でもあった Charoen 氏は「2002 年に同協会の話を受けて引き受けたとき、国王側からバドミントンの発展に重点的に取り組むよう申し入れがあり、『国王はあなたにバドミントンのために尽力してほしいとお考えで、金銭的な心配はしなくてもよい』と言われた。」と述べている。

同氏はかつて王宮で国王とバドミントンをしたことがあり、そのときのことを次のように語っている。「国王はバドミントンのあらゆる側面に関心があり、ショットが力強かった。」また、「プレー後にはよく国王とクイティアオ（タイ風ラーメン）を食べ、国王は一般人のようであった。」

Charoen 氏はまた、国王のバドミントンの戦術面での知識に圧倒されたことがある。同氏の最大のライバルであったデンマークの Erland Kops 選手は、パワーがあり、スマッシュが厄介で、これまで何度も負けていることを国王に伝えたところ、国王は彼にこうアドバイスした。「もっとドロップショット（※相手の高い返球を、ネット際に落とすショット）を多用しなさい。そして、ハイショット（※軌道の高いショット）を打つ必要があれば、彼にとって不利なサイドにシャトルを打ちなさい。」この戦術がうまく機能し、Charoen 氏は Kops 選手を破り、シンガポールの大会でタイトルを手にした。

さらに国王はかつて、Charoen 氏率いるタイ代表チームとインド代表チームとの対戦に立ち会われたことがある。同氏は「インドとの対戦では、過去幾度も敗戦を喫していたが、そのときは、国王が見られているという意識が我々に力を与え、自分たちのベストプレーをし、ついに貴重な勝利を手にした。我々は国王のためにプレーしたのである。」と述べている。

また、同氏は国王からの支援金でイギリス留学し、出国前に国王からこうアドバイスを受けた。「イギリスの生活や社会も学んで帰ってきなさい。そして君自身の人生を向上させなさい。私は同様の経験を自分と家族に活かしてきた。君は知見を活かし、様々な方法でタイを支援することができる。」

「プミポン国王はアスリートであり、世界のどの国王よりもスポーツを愛する国王であった。」

その一方で、前世界チャンピオン・世界ランク No.1 のバドミントンのスター選手である Ratchanok Intanon 選手（※2013 年の世界選手権大会女子シングルスで、タイ人初の金メダルを大会史上最年少（18 歳）で獲得したタイのスター選手）は自身のインスタグラムに次のように投稿した。「私は一小説の中の王様は王座に腰かけているが、我が国王は我々庶民のようであるーという一文が気に入っている。我々国民は国王を愛している。国王はこれからも常にタイ国民の心の中に生き続ける。」（以上）

上記の記事から、プミポン国王が 70 年間の在位の中で、バドミントンに長きに渡って尽力され、バドミントンにいかに精通されていたかが少しでもおわかりいただけたでしょうか。また、国王は国民と接するとき、彼らの目線で優しく接し、御崩御後も多くの国民から敬愛されていることが伺えます。

前頁で紹介したタイ人選手の活躍の陰にも、こうした国王の支えがあったのですね。ちなみに 10 月下旬にデンマークで開催された国際大会（前頁のものより上位グレードの大会）で、タイ人選手が男子シングルスで優勝、男子ダブルスと女子ダブルスで 3 位という、ここ最近では最も良い成績を収めました。きっと国王もこの結果を喜ばしく思われていることでしょう（でも、まだまだ満足はされていないかな）。

最後に、プミポン国王のタイスポーツ界への貢献に対し敬意を表するとともに、今後も国王の御功績が礎となってタイスポーツ界がさらに発展し、国民に多くの夢と希望が与えられることを心より願っています。

■失業率がタイの教育制度にスポットを当てる

タイ工業連盟 (FTI) によると、多くの産業で熟練労働者が不足している一方で、ここ数ヶ月のタイの失業者数は同国の新規投資の不足を反映しており、これは国の教育部門の失敗を示している。

失業率は先月 1.2 パーセントに上昇したが、多くの産業が雇用レベルを維持しているため、企業に対する圧力団体はいまだにこのことを問題視していない。新規投資が不十分で新卒者が就職できていないため失業率が高くなっており、さらに新卒者の中には企業側の要求を満たしていないものもある。

FTI の Chen Namchaisiri 議長は「多くの産業は依然として外国人労働者を雇用し、熟練労働者を求めているので、ほとんどの産業では既存労働者を解雇していない。」と述べ、

「自動車産業界におけるここ最近の解雇は、雇用契約の満期によるものであり、経済成長の失速によるものではない。」

「新規の学士卒業生、特に職業学校の卒業生は、彼らのスキルが産業側の要求を満たしておらず、就職時の困難に直面している。」と続けた。

同議長はまた「失業率が上昇したことは産業成長に仕える労働者を輩出するタイの教育制度がうまくいっていないことを反映している。」

「特にタイ政府が先端技術産業クラスターに重点を置いていることに伴い、政府は熟練労働者を輩出し、職業学校のイメージを改善することに重点を置いた教育制度を開発するべきである。」と述べた。

また「タイの職業学校を魅力あるものにしなければならない。タイのより多くの保護者が、卒業後の就職を保証できる職業学校に自分の子供たちを積極的に入学させるよう、同協会は、職業学校が開講コースのシラバスやイメージを改善するために国外の職業学校と協同するよう奨励してきた。」とも述べた。

FTI は、専門的職業を推進すべく多くの外国の職業学校と協同している。目標とする国には、これまで質の高い職業教育を受けた卒業生を輩出した実績のある日本、オーストラリア、ドイツが含まれている。

タイの国家経済社会開発委員会事務局によると、失業率は数年前の 0.6-0.9% から先月の 1.2% まで連続的に上昇した。

さらに、昨年大学を卒業した学生 270,000 人の約 3 分の 1 (27%) が就職できなかった上、多くの産業は依然として主に職業学校出身のスキルを持った労働者の雇用を求めている。

タイ高等教育委員会は、昨年の大学卒業生 270,000 人の半数以上は社会科学、人文学、教育科学の学位を取得しており、これらは産業界での需要はあまりないと報告した。

タイ商工会議所の副所長 Bhumindr Harinsut 副所長は「経済成長が低下しているさなか、企業が新規投資を拡大または誘致できなかったことが失業率の上昇を招いているが、現在のところ解雇の兆しはない。」と述べた。

同副会長は「卒業生の 70-80% は産業・企業側の要求に応えることができていないため、失業率はここ数か月で上昇した。」とも述べている。

商業省 Suvit Maesincee 副大臣は、政府が Thailand 4.0 モデルを奨励することによって、十分なスキルを持たない労働者が失業してしまうことを認めた。

政府はこの問題の解決と教育制度の開発促進に取り組む。

(2016 年 7 月 20 日 The Nation 紙)

■高等教育の強化を後押しする質の保証

ASEAN8 ケ国の 200 以上の大学は、来年以降、組織レベルの質保証において同じ制度を使用することになる。

ASEAN 大学ネットワーク質保証 (AUN-QA) によって開発されたこの制度は、東南アジアでは今までに類を見ないものである。そのため、この進展は、ASEAN の高等教育にとってより良い未来に向かって進む道を舗装するための重要な一里塚となる。

AUN-QA は、2017 年 1 月に機関レベルの評価に初めて乗り出す。

この新しい質保証は年内に、ASEAN8 ケ国 28 大学の 98 評価において 220 以上の学部課程及び大学院課程プログラムをカバーすることが期待される。

この数字のうち、ベトナムだけで 32 評価において 61 の学部課程及び大学院課程プログラムが実施される。

質保証に対する組織的アプローチは、組織の戦略や教育、研究、サービスの体系的かつ機能的な質保証を含め、組織全体を考えることになる。これは、教育、研究、サービスの質を総体的に高めること、そして内部の質保証制度の有効性を評価することを目的にしている。

つまり、組織的な質の評価は、ASEAN 各国の高等教育の組織的な質保証に向け、AUN-QA ネットワークの進歩的開発目標を支援することになる。

AUN-QA は 1998 年の第 4 回 AUN 理事会により設立され、教育基準の調整や ASEAN の大学の教育機関としての質の継続的改善の追求というミッションを実現するために、ASEAN の質保証を改善し続けている。

組織レベルの AUN-QA フレームワークは、ASEAN 質保証フレームワーク、欧州高等教育圏における質保証の基準とガイドライン及びボルドリッジ・パフォ

ーマンス・エクセレンス・フレームワークとの共同で作成され、総合的な AUN-QA の組織的レベルフレームワーク作りを目指している。

第 1 回の機関レベルの質保証評価に併せて、AUN-QA はまた、世界初となる機関レベルのガイドブックを導入する。「組織レベルでの AUN-QA 評価の手引き」第 2 版は、AUN の加盟大学と AUN-QA の準会員機関が各機関の質を実装、評価するためのツールとして使用される。

(2016 年 7 月 21 日 The Nation 紙)

■タイの 8 大学が世界大学ランキングにランクイン

タイの高等教育機関 8 校が最新の世界大学ランキングリストにランクインし、チュラロンコン大学 (CU) がタイの大学の中でトップであった。

本日公開された QS 世界大学ランキング 2016/2017 で、CU は昨年より順位を一つ上げ 252 位であった。また、マヒドン大学はタイの大学では 2 番目で、昨年の 295 位から 283 位に順位を上げた。

その次はチェンマイ大学で、昨年に続き 551-600 位であった。タマサート大学は昨年同様 601-650 位であった。一方、カセサート大学は 650-700 位から順位を落とし、コンケン大学、キングモンクット工科大学トンプリ校及びプリンスオブソクラ大学と同じ 701+1 位となった。

QS 世界大学ランキングは 2004 年に初めて公表され、評価や論文引用などの 6 つの評価指標に基づき、今年は 916 大学がランキングされた。タイの大学の学術評価は改善されている一方、研究論文の引用数は減少している。

世界中の 3,800 以上の機関がリスト作成時にレビューされ、マサチューセッツ工科大学がトップを維持し、アメリカの 2 大学がそれに続いた。

イギリスのケンブリッジ大学は 4 位で、カリフォルニア工科大学は 5 位であった。

東南アジアの大学で最高位だったのは、12 位のシンガポール国立大学で、同じくシンガポールの南洋理工工科大学が 13 位であった。

(2016 年 8 月 6 日 The Nation 紙)

■STEM 教育を改善するための取り組み

タイ教育省は、英語学習トレーニング及び科学技術教育並びに国立卓越事業拠点の再評価に関して、Thai Professionals in America and Canada (ATPAC) と連携することを合意した。

教育省 Teerakiat Jareonsettasin 副大臣は、先週 ATPAC の代表と面会してタイの教育制度を改善する方法について協議し、3 事業に取り組むことを決めた。

ニュージャージー工科大学教授兼学部生教育担当副議長で ATPAC 理事会の顧問を務める Methi Wecharatana 氏は、「最初の事業ではタイの学生向けに双方向の英語学習コースを提供するため、Apple 社の Siri の仮想秘書機能プログラムによって開発されたアプリケーションを使用する。」と述べた。

ATPAC は、国立卓越事業拠点の業務評価だけでなく、科学・技術・工学・数学 (STEM) 教育の向上を支援するよう関係機関との協同行う。

タイは現在、国立卓越事業拠点が 15 機関あり、そのうち 11 機関はタイ教育省傘下にあり、残りの 4 機関はタイ科学技術省傘下で生物工学、物質科学、コンピュータ、ナノテクノロジーに関する研究機関となっている。

Methi 氏は「これらの拠点は、タイの発展には不可欠であり、事業をうまく遂行できれば、この国のあらゆるものを変えるだろう。」と述べた。

ATPAC は、タイ高等教育省 (OHEC) とタイ国立科学技術開発庁と共同で「タイの STEM 教育における高等教育機関と民間セクターの役割」と題するセミナーを月曜日に開催する。

Teerakiat 副大臣はこのセミナーで開会の挨拶を述べることとなっている。また、その他の講演者には、タイ国家科学技術イノベーション政策局の Yada Mukdapitak 副事務局長、OHEC の Aporn Kanvong 事務局長、タイ石油公社 (PTT) の Pailin Chuchottaworn 前総裁兼最高経営責任者がいる。

(2016 年 8 月 16 日 The Nation 紙)

■より多くの研究者を輩出するための 20 年計画を政府が策定

政府は、今後 20 年間でタイの産業発展に従事する博士研究員を 12,000 以上輩出するために 340 億バーツ以上の予算を割り当てることとしている。

Prajin Juntong 副首相によると、この 20 年計画は今年から開始し、Prayut Chan-o-cha 首相が議長を務めるタイ国教育・政策開発委員会、いわゆる教育特別委員会にて昨日承認された。

同計画は、対象とされる 10 産業の発展や技術開発や技術イノベーションに重点を置く Thailand 4.0 のコンセプトに対応する博士研究員 12,290 人を輩出することを目指している。2016 年度においては、10.7 億バーツが 300 件の奨学金に割り当てられる。これは対象産業及び Thailand 4.0 のコンセプトである「タイで研究を行う極めて優れた研究者を ASEAN 及びその他 6 か国から誘致するための 60 件の奨学金」及び「国立機関や国営企業による研究の一環としての 100 件の奨学金」に基づくものである。

同計画のもと、2017 年度も 10.7 億バーツの予算が博士課程を修了する学生 416 名を輩出するために割り当てられる。

「2018 年以降の予算は新政府によって承認される。」と Prajin 副首相は述べた。

この政策は、タイ研究財団 (TRF) が 1996 年より指揮している Royal Golden Jubilee (RGB) PhD 事業の一環である。

タイ国家科学技術・イノベーション政策事務局によると、タイは 2014 年人口 10,000 人当たりの博士研究員は 9.5 人であるが、先進国での割合はタイの 10 倍以上となっている。

政府の担当陣営は、2036 年に人口 10,000 人当たり博士研究員数を 80 名にすることを計画している。

タイ商工会議所の Isara Vongkusolkrit 議長は、人材育成への政府投資に賛成している。

同議長は「対象 10 産業の経営者らは、自分たちがどのような専門技能を必要としているのかわかっているのだから、それに応じた研究者を輩出するカリキュラム策定を支援する機会が同経営者らに与えられるべきだ。」と述べ、

「同事業から最善の利益を得るため、国外投資家からの意見にも耳を傾ける必要がある。」とも述べた。

タイ工業連盟 (FTI) の Vallop Vitanakorn 副会長は次のように述べた。「タイは新時代に対応する Thailand 4.0 に取り組んでいるので、今後 10 年にわたりスキルを持つ労働者への要求を満たすよう、より多くの高等教育修了生を確保するだけでなく、タイの教育制度を進展させる必要がある。」

その一方で、同副会長は「私にはタイが実際に必要とする博士課程修了生の分野の詳細を調査することはできない。」とも述べ、

「この政策に関してコメントできるほど十分な知識を持ち合わせていない。」

「しかし、政府が本当に持続可能な方法でタイを発展させたいのであれば、それは正しい行動だろう。」と続けた。

マヒドン大学の Udon Kachintorn 学長は、大学が研究者を輩出できるよう財政的支援をするこの政府計画に同意した。同学長は「これは良い考えで、全ての大学がこの計画を支援するだろう。」と述べた。

また、同学長は「私の目から見れば、タイの全大学には Thailand 4.0 に向かって国をリードするためのイノベーションに対して研究を行う能力はあるが、これまでのところ資金不足のためそれができなかった。」

「研究には、どうしても国または民間団体の支援による巨額な予算が必要である。」とも述べた。

同学長はさらに、TRF、タイ教育省・科学技術教育振興研究所及びタイ高等教育委員会を含む研究実施用予算を受ける全機関の業務をとりまとめる委員会を組織するよう政府に求めた。

(2016 年 8 月 20 日 Bangkok Post 紙)

■大学は基準を向上させる困難な試練に直面

高等教育レベルを ASEAN 地域内で国際レベルに引き上げることは、資金の乏しい国にとっては課題である、と専門家は指摘

ASEAN 地域内の高等教育機関が、シラバスの問題、制度の多様性、国際系職員の不足や政府の限定的な支援など、国際基準を満たそうと取り組む際に直面する課題を研究者らは強調してきた。

ASEAN 経済共同体が今年正式に発足したことに伴い、教育の質改善は、依然として同共同体の主な目標の一つとなっている。

このトピックは、先日のタイ外国人記者クラブでの「ASEAN は世界的高等教育機関としての目的地になれるか？」と題されたフォーラムの焦点であった。

バンコク大学の James Gomez 教授は「ASEAN の多くの大学は教育の質を改善し、さらに重要なことには、より多くの学生を誘致しようと大学をリブランド化するため、国際的な組織になろうと改革に取り組んでいる。」と述べた。

「多くの大学の役員は、大学のブランド価値を高めるために国際化を選択する。それはより多くの学生を誘致することによって、その大学の財政的実行可能性を保証するからである。」と同教授は述べた。

一方で、「多くの大学は通常、シラバスを母国語から英語に翻訳するため、カリキュラムは、実際には国際化されていない。」とも述べ、

「他の問題としてシラバスは通常その国の人が作成するため、結果的に真に国際的に通用するものではなく、母国に特化した問題に焦点が向けられる。」

「この分野での私の経験から、国際系の大学職員の多くは、一般的には大学の言語部門や国際学科で勤務し、大学の政策を指揮できるような主要学部や幹部ポジションには配置されない。」と続けた。

ASEAN 大学ネットワーク事務局長の Nantana Gajasen 准教授は「ASEAN 各国の教育制度は多様性が大きく格差も大きいため、ASEAN 地域内で一本化された制度を調整することは困難である。」と述べた。

多様性によって単位移行が困難に

「ASEAN での高等教育の国際化の主な課題は、教育制度の多様性と教育の質の認識の相違である。この相違によって、ASEAN 諸国間で、またその地域を超

えての学生と単位の移行が困難になっている。」と Nantana 氏は述べている。

Gomez 氏は「ASEAN 内の国際系職員は、低給料、研究補助金の不足、政府の規制上の障壁が原因で不足している。」と付け加え、

「ASEAN のシンガポールやマレーシアのように財政的に豊かな国とその他の国には所得格差がある。この所得格差によって、所得の低い国々で勤務する国際系職員は少ない。」

「その他の障壁は、研究補助金の制限である。例えば、マレーシアは自国の補助金への申請はマレーシア国民のみに制限している。さらに研究奨学金に対する検討は、通常、国家的視点にのみ焦点を当てており、研究者が国際的視点での研究資金に申請することは困難である。」と述べた。

UNESCO アジア太平洋地域教育局上級顧問の Wesley Teter 氏は、中国では政府の規則が国際系職員にとっての障壁になっていたという同国での教育経験を説明した。

Teter 氏のケースでは、中国政府が課した厳しい情報規制によって、学術研究はさらに困難なものとなり、それによって国際的な研究者に対するアピールが減少した。

Nantana 氏は「国際化の別の大きな問題は、財政上の問題である。」と指摘し、「シンガポールやブルネイのような ASEAN の中でも高所得の国々は、自国の大学の国際化を奨励するのに大した時間を要しないが、所得の低い国々ではその任務は難しい。」

「低所得の国々には、インフラの不足など予算不足から生じる問題がたくさんある。タイですら、国は収入源を見つけることを各国立大学に任せており、もはや政府からの支援を行っていない。」と述べ、

「しかし、私見では、豊富に資金があるからといって、教育の質や国際化の成功を保証するわけではない。大学の管理者層や教授らの考え方は、国際教育に適合させるためだけではなく、変える必要がある。」とも述べた。

(2016 年 8 月 22 日 The Nation 紙)

■2018 年開始の大学入試に関する新制度を承認

二段階制となる新「house-clearing」制度により、生徒らが大学入試受験のために一受験地から別の受験地に移動しなければならないという現在の問題が解決されるだろう。」と教育省事務次官の Kamjorn Tatiyakavee 氏が昨日述べた。

高等教育委員会とタイ大学長会議 (CUPT) による先日の会合では、2018 年度にはマタヨン (日本の中学校・高校の中等教育に相当) 6 年生の生徒らは 3 月中旬に入試を一度だけ受けることで合意した。

これによって、一般適正試験 (GAT) と専門適正試験 (PAT) の受験前に、生徒らには「二段階 house-clearing」制度による点数が与えられる。

Kamjorn 氏は「約 400,000 人の生徒が現在、大学の「house-clearing」試験によって採用されている一方で、100,000 人以上の生徒が「admission」共通試験制度によって採用されている。」と述べた。

また、「今回の新制度によって、タイ国立教育試験サービス機構 (National Institute Educational Testing Service) がタイ国内で一斉に試験を実施することが可能となる。」とも述べている。この制度は、かつて廃止され admission 制度に置き換わった旧共通入学試験に近い。

新制度下では、学生は志望大学 4 校への願書提出前に自分の得点ができる。大学側は一次「house-clearing」で有資格候補者を選抜する。

一次試験で合格しなかった生徒が二次「house-clearing」で入学できるよう、その生徒らに対し大学の受入可能定員が公開される。

「この新制度の申請とスコア提出はオンラインででき、国内各地に試験会場がある。学生は各科目の受験料と「house-clearing」の受験料を支払うだけでよい。」と同氏は述べた。

CUPT の Suchatchawee Suwannasawat 副議長は、「Pong-In Rakariyatham をトップとする入試フォーラムのワーキングチームは、提案された変更事項に関する報告を来月審議する。」

そして、「全関係者に対し各自の意見、情報を求めるべきで、CUPT は入試 9 科目に加え GAT と PAT の結果に対して共通試験を使用することに合意した。」と述べた。

しかし、CUPT は生徒らの学業成績換算評点 (GPAX) 及び Ordinary National Educational Test (O-ネット) の結果が十分に活用されていないことを懸念していた。同副議長は「これによって、生徒らが入試 9 科目と GAT/PAT 試験に対する個別指導授業を受け、学校での授業をおろそかにしてしまう可能性がある。」と語った。そして、「関係機関はこの件について Dapong Ratanasuwan 教育大臣と近いうちに協議する。」とも述べた。

(2016 年 8 月 27 日 The Nation 紙)

■タイは研究・イノベーション分野で遅れをとっている

トムソン・ロイター社が行った調査によると、ASEAN の研究論文のシェアは 2006 年以降で 2 倍近くになり、特許活動は過去 3 年間で 40%以上拡大しており、これに伴い ASEAN は研究・イノベーション活動のハブになりつつある。

ASEAN10ヶ国は、トムソン・ロイター社のオンライン学術データベースサービス上で索引に載った世界の学術文献のシェアが2006年の1.37%から昨年は2.43%になり、約2倍となった。

世界的にはおよそ50%増となっているが、これと比較するとASEANの全研究論文発表数は過去10年で約3倍となった。

しかしながら、世界の研究論文におけるタイの研究論文発表数とシェアは、「緩やかに」増加しており、昨年索引に載った論文は72,000件で、これは同データベースの0.48%のシェアとなっている。

それにもかかわらず、研究の関連引用影響力あるいは研究の質によって示される影響力という点では、タイは2006年以降世界平均に近いところを追従しており、過去2年間は上昇傾向にある。

比較すると、同報告書内でマレーシアの研究論文発表数は、2006年の1,900件から2015年の11,000件以上と過去10年にわたり約500%の急激な増加を示している。

一方、ブルネイ、ベトナムも2006年から2015年にかけて少なくとも300%増と、研究論文発表数が急激に増加している。

「ASEAN－研究・イノベーションハブの出現」と題し、トムソン・ロイター社が行った調査では、各国の研究及び特許に関する能力に応じてASEANを4つのグループに分類している。

シンガポールは唯一第1カテゴリーに、マレーシアとタイは第2カテゴリー、ベトナム、インドネシア、フィリピンは第3カテゴリー、そして、ラオス、カンボジア、ブルネイは第4カテゴリーに分類されている。

マレーシアは「積極的」

「タイの評価が思わしくないというより、タイと比較してマレーシアは自国の研究・イノベーション活動を積極的に推進している。」と、トムソン・ロイター社ソリューション・コンサルタントのSee Diu Seng氏は昨日バンコクで行われたメディアインタビューで述べた。

「高被引用文献（世界的な特定分野で上位1%）」に登録している研究の占有率に関して、昨年のリストにタイは初めて3件掲載され、そのうちの2件はタイ人研究者によるものであったと、See氏は指摘した。

一方、マレーシアは昨年3件掲載された。

「昨年の掲載はタイ初のことで、それまで同国がそのリストに掲載されることはなかった。」と同氏は述べた。

トムソン・ロイター社の上級特許分析官であるBob Stembridge氏は「ASEANの多くの国々が同じように

医療や化学技術に重点を置いている中、タイだけは工学技術をより重視している。」

「Qualcom社（アメリカの移動体通信の通信技術および半導体の設計開発を行う企業）はASEAN3ヶ国で最も多くの特許を有しているが、ASEANはハイテクをあまり重視していない。」と述べた。

タイが研究・イノベーション分野で向上するために、大学と産業セクターとがさらに連携するよう取り組み、また関連団体が商業化に成功したことに対し報酬を与えたアメリカの成功から学ぶべきである、とStembridge氏は提案した。

「優れたアイデアをお金に換えるというイノベーションの観点では、産業と大学が協同することが最良の方法である。」と同氏は述べた。

「研究はグローバルなものであり、地域的な競争ではない。それは、世界で競うために人材プールと共同ネットワークをグローバル化する必要があるからである。」とSee氏は述べた。

同氏は「マレーシアがタイよりも多くの外国研究者や学生を誘致できているのは、言語がその理由のひとつかもしれない。」とも述べ、「マレーシアはタイよりも資金が豊富なため、同国が国際的人材を誘致するためのインセンティブを策定することを助長している。そうは言っても、原油価格の急落に伴い、このところマレーシアの予算は削減されている。」と加えた。

(2016年8月27日 The Nation紙)

■教育大臣がタイの大学に政策を提言

2016年9月15日、高等教育委員会(OHEC)は600名の大学幹部を対象にタイの大学政策に関する会議をバンコクで開催した。教育大臣のDapong Ratanasuwan氏がこのイベントの議長を務め、参加者らに対し様々な政策を伝えた。

教育大臣は「大学政策は、来月閣議決定される予定の、2017年から2031年に向けた国家教育計画と同様に現在の政府計画と関連付けるべきである。」と述べた。

大臣はまた、タイの新しい省としてOHECを再編・改革する方法についても言及した。しかし、この問題は現在議論中で、決定には至っていない。加えて、議論が必要とされるタイの大学に適したガバナンスに関して問題がある。

教育大臣に代わり、大臣書記官が教育省、国家教育計画及び教育省の戦略について発表した。同書記官はまた、タイの教育問題の他、喫緊の解決が求められる5つの事項、つまり、人材管理、予算、資源、施設・設備、運営についても述べた。

政府が新しい「Thailand 4.0」政策を掲げたので、タイの大学はネットワークを通じて、国内の

10,947 校の学校と積極的に連携するべきである。それらの学校はまた、「Universities 4.0」にならなければならない。これはつまり、教育マネジメントを進展させ、タイの経済や関連のある社会的側面に影響を与える新たな研究を創出する必要があるということである。

それにも関わらず、タイの大学は以下のような多くの問題に直面している。

- ・ 高等教育に係る予算
- ・ 大学と大規模公共投資の調整ができないこと
- ・ 学士課程学生数の減少
- ・ タイ人大学院生数の過多
- ・ 商業を基調とした課程
- ・ 高い失業率
- ・ 必要とされていない労働人材
- ・ 理系学生と研究者が少ないこと
- ・ 無資格の教員課程卒業生
- ・ 英語スキルが低いこと
- ・ 不十分なガバナンスに関連した問題
- ・ 研究の質が低いこと

最終的には、タイの大学に対しいくつか提案がなされた。

一つ目は、特定の卓越性に向けタイの大学を管理する計画である。これは有資格の職員や教員、そして特定領域の研究の質の改善を通じてなされる。

二つ目は、職業教育の領域において、より多くの学生に修学、就業するよう奨励するために、職業教育の学士課程を継続するための計画である。

三つ目は、タイの学生を高いクオリティを有する労働人材として将来的なキャリアに向けて準備させるための職業統合的学習（Work-Integrated Learning, WIL）プログラムの開発である。

そして、四つ目は、タイの経済や社会計画に対応する大学レベルの研究を改善することである。

大学は、現在上述のような問題に直面しているため、最後に教育大臣は、学術的、行政的かつ良好なガバナンスの観点からタイの大学の自主性について言及した。そのため、大学はそれらの問題を解決する能動的かつ持続可能な方法について考える必要がある。

（2016 年 9 月 20 日 タイ教育省 HP）

日本学術振興会バンコク研究連絡センター アクセス&コンタクト

アクセス

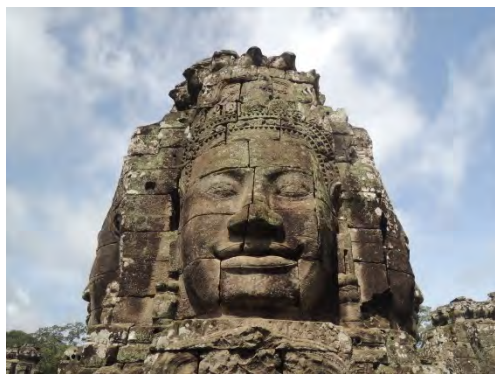
高架鉄道 (BTS) Asoke 駅、1 番出口から徒歩 5 分
地下鉄 (MRT) Sukhumvit 駅、1 番出口から徒歩 5 分

コンタクト

1016/1, 10th floor, Serm-mit Tower, 159
Sukhumvit Soi 21, Bangkok 10110, Thailand
Tel +66-2-661-6533 Fax +66-2-661-6535
Website: <http://jsps-th.org> Email: jspsbkk@jsps-th.org
facebook: JSPSBangkok



■ 表紙写真紹介



Angkor Thom (アンコールトム・カンボジア)

12世紀後半にジャヤヴァルマン7世により建設されたと言われ、アンコール遺跡群としてアンコールワット等と共にユネスコ世界遺産に登録されている。写真はアンコールトムの中央に位置するバイヨン寺院の塔の一つ。見上げるほど高い54の塔に刻まれた巨大な顔は、「クメールの微笑」とも呼ばれ、一つ一つ微妙に異なる顔をしているとも言われる。

この他アンコールトム構内にはピラミッド型寺院の「パプーオン」、三島由紀夫が作品のヒントにしたという「ライ王のテラス」等があり、技術の粋を集めた遺跡群に圧倒される。

(一部参照: DTAC カンボジア観光情報局)

■ 編集後記

まず初めに、タイのプミポン国王陛下の御崩御に衷心から哀悼の意を表します。御崩御から一ヶ月程度経ちましたが、タイ国内では首相府より国民に対し適切な行動が求められていることから、以前より静かになった印象はあるものの大きな混乱はないように感じます。しかし、タイにとって歴史的な転換点であったことは間違いなく、これも現地での貴重な経験として今の景色をしっかりと焼き付け、今後の動向にも注視していきたいと思います。

今回の「バンコクの風」では、JASTIP プロジェクトリーダーの高木映氏より、JASTIP の取組についてご寄稿いただきました。前号の特集記事でも「科学技術イノベーション」をテーマに取り上げましたが、これまで経済的發展を続けてきたタイが今後更なる發展を遂げるためには、科学技術イノベーションによるブレイクスルーが非常に重要であると認識されています。さらに昨年末に発足した ASEAN 経済共同体 (AEC) による取組と効果的に連動させるためにも、タイ国内に止まらず ASEAN 全体での視点、取組が非常に重要になってくると感じております。記事内にもありました通り、JASTIP は日本と ASEAN 間で、国と専門分野を超えた長期的な連携に取り組まれており、まさにその先駆的な取り組みと言えるのではないのでしょうか。

高木氏にはお忙しい中、貴重なお時間を割いて本稿のためにご執筆いただきましたことをこの場を借りて御礼申し上げます。

(バンコク研究連絡センター 国際協力員 大田 敏雄)